

I. 『東醫寶鑑』と韓国韓医学の歴史について」慶熙大学校韓医科大学医史学教室 金南一教授  
 II. 「朝鮮総督府の医療・衛生政策—韓医学関連資料を中心に」一橋大学大学院言語社会研究科韓国学研究中心 李圭洙教授  
 III. 「韓国の食治伝統」韓国韓医学研究院学術主任 安相佑  
 IV. 『鍼灸病証学』に引用された『東醫寶鑑』について「一経絡治療への影響第1報」順天堂大学大学院医史学研究室 吉田和裕  
 V. 「歴史は飲食を変え、飲食は歴史を造った—日本の肉食と戦国武将の食術」慶熙大学校韓医科大学史学科講師の尹誠翊の順に報告されました。

講演者、参加された方は研究者が中心で、ほとんどが韓国人、数人の日本人と中国人で、実に国際色豊かな顔ぶれでした。発表及び質問も韓国語や中国語、そして日本語という流れで、日本にお

いて、これほど他言語での会話が展開され、ここは一体何処なのか、この空間だけがなぜか日本ではなく異国にいるような錯覚に陥り、印象深いものでした。

学会は、予定よりも時間をオーバーして終了し、発表者と参加者合同で記念撮影がありました(写真)。

その後の懇親会では、フィールドの異なる専門家の方々との新たな出会いもあり、大変有意義な時間を過ごすことができました。このような学会は、大規模ではありませんが、各分野の研究者との興味深い議論を交わすことで、新たな知見を得ることができました。今回、改めて学会の大切さに気付かされ、今後も国際学術シンポジウムなどで積極的に発表や交流の場を設けていきたいと強く感じることとなりました。

## 例会記録

日本医史学会 3・4・6月例会  
 中止

## 例会抄録

# 江戸時代の医療とジェンダー～「女医師」を中心に

鈴木 則子

従来の研究史の中で、江戸時代の女性医師の活動は楠本イネなどごく少数の著名人をのぞいて、ほとんど注目されることがなかった。だが報告者は江戸時代の庶民医療の中で女性医師が一定の位置を占めていたと考えており、この問題についてこれまでも論文や口頭発表を通じて論じてきた(第119回日本医史学会総会・学術大会報告「江戸時代における大坂の女医」(2018年6月)など)。今回の報告では、「女医師」と呼ばれた女医の活

動に焦点を絞り、その活動の実態と江戸時代の人々の認識について検討を加えた。

一般的に「女医師」=こおろし婆というイメージが存在するが、史料を確認していくとこのイメージは東日本特有のものである。たとえば山東京山作・池田英泉画『北里花雪白無垢』(文政5年(1822))の挿絵では、女医者(女医)の診療所の門口に「女いしや 流水」「朔日丸」の文字が見える。

だが上方の史料では「女医師」という言葉は、